

目次

第1章 伝統を受け継ぎ新たな歴史を …… 7

■ インタビュー

- ◇建築家 隈 研吾氏 …… 8
日本の伝統を受け継ぎ未来へつなげるレガシーを、建築で体現
- 新国立競技場 ……
株式会社梓設計 ……20
豊富な知見をもとに、新たな競技場のモデルを設計
取締役副社長 安野 芳彦氏
大成建設株式会社 ……28
文化や歴史が融合した、日本を象徴するスポーツの聖地として
エグゼクティブ・フェロー 設計本部副本部長 細澤 治氏
設計本部特定プロジェクト部長 川野 久雄氏
- GINZA KABUKIZA ……
松竹株式会社 ……36
“百年劇場”の構想をもとに、新しいスタンダードを実現
専務取締役 事業本部長 事業部門・不動産部門担当 武中 雅人氏
株式会社三菱地所設計 ……44
建築は建て替え、歴史と精神は継承、その実現に向けて
執行役員 建築設計三部長 野村 和宣氏
清水建設株式会社 ……52
幾多の困難を乗り越え、後世に残る建築の新しいモデルを構築
元・歌舞伎座計画建設所 建設所長 水田 保雄氏
- 三越日本橋本店 ……
株式会社三越伊勢丹 ……60
本館の重文指定やリモデルを期に百貨店の新しい時代を目指す
執行役員 百貨店事業本部三越日本橋本店長 浅賀 誠氏
- 東京大学大学院情報学環 ダイワユビキタス学術研究館 ……
大和ハウス工業株式会社 ……68
最先端の建築に挑み、世界的視野で業界をリード
代表取締役専務執行役員 技術本部長 生産購買本部長 海外事業技術管掌
環境担当 土田 和人氏
- 京王高尾山口駅 ……
京王電鉄株式会社 ……76
都市近郊の豊かな自然を生かし歴史と文化を受け継ぐ地域密着型の
観光・交流拠点に
専務取締役・鉄道事業本部長 高橋 泰三氏
- 御園座タワー ……
積水ハウス株式会社 ……84
歴史と文化を継承してまちのにぎわいを創出する劇場・店舗・分譲
マンションの複合開発
名古屋マンション事業部長 八木 哲朗氏
- 新風館再開発計画 ……
N T T 都市開発株式会社／株式会社大林組 ……92
“伝統と革新の融合”が個性豊かなホテルとして結実
N T T 都市開発株式会社 代表取締役副社長 チーフデザインオフィサー (CDO)
楠本 正幸氏
株式会社大林組 新風館再開発烏丸工事事務所 所長 八田 幸保氏

| | |
|-------------------------------|-----|
| ○ホテルロイヤルクラシック 大阪難波 | |
| 株式会社ベルコ | 100 |
| 「ミナミの顔」を受け継ぐ、最高峰のプライダル・ホテル | |
| 相談役 齋藤 齋氏 | |
| 鹿島建設株式会社 | 108 |
| 至高のデザインを支えるものづくりの「心」と先端技術 | |
| 関西支店 建築設計部建築設計グループ担当部長 小松 啓一氏 | |

第2章 次代への贈り物 …… 117

■ インタビュー

| | |
|--|-----|
| ◇東京工業大学 特命教授・名誉教授 先進エネルギー国際研究センター長 柏木 孝夫氏 | 118 |
| 豊かな暮らしの未来像となるスマートコミュニティの実現へ | |
| ◇INIA D東洋大学学部長（工学博士）坂村 健氏 | 128 |
| オープンデータの広がりによる、新しい概念がレガシーに | |
| ○かをり商事株式会社 | 138 |
| 女性の力で、手作り菓子を愛情込めて作り上げる | |
| 代表取締役社長 板倉 敬子氏 | |
| ○東京電力ホールディングス株式会社 | 146 |
| 環境変化と電気事業の変容～未来における新たなライフラインの姿～ | |
| 技術・環境戦略ユニット 技術統括室長 兼 経営企画ユニット企画室（技術担当）兼 経営企画ユニット総務・法務室 東京五輪・パラリンピックプロジェクト準備室長 北島 尚史氏 | |

| | |
|---|-----|
| ○東京地下鉄株式会社 | 154 |
| 首都の地下空間で進むオリパラ後も見据えた大改造 | |
| 取締役 経営企画本部経営管理部長 株式上場準備室長 企業価値創造部長 小坂 彰洋氏 | |
| ○東邦ガス株式会社 | 162 |
| 人と環境と地域のつながりを育む「みなとアクルス」 | |
| 用地開発推進部長 神谷 泰範氏 | |
| 用地開発推進部港明開発グループマネジャー 今枝 薫氏 | |
| ○JXTGエネルギー株式会社 | 170 |
| 水素エネルギーとFCVの普及で低炭素社会の早期実現へ | |
| 取締役常務執行役員 新エネルギーカンパニー・プレジデント 桑原 豊氏 | |
| ○凸版印刷株式会社 | 178 |
| ポスト2020は人間がインターネットを介してテクノロジーと融合する「I o A」で社会課題を解決 | |
| 情報コミュニケーション事業本部ソーシャルイノベーションセンター社会基盤構築推進本部デジタル事業企画部長 山浦 秀忠氏 | |
| 情報コミュニケーション事業本部ソーシャルイノベーションセンター社会基盤構築推進本部デジタル事業企画部課長 名塚 一郎氏 | |
| ○富士通株式会社 | 186 |
| 世界に誇れる、後世に残せる文化を、ソフト面でも普及啓発 | |
| 執行役員常務 東京オリンピック・パラリンピック推進本部長 廣野 充俊氏 | |

第3章 わが国の未来へ …… 195

省・庁

- 総務省 …… 196
2020年に向けた社会全体のICT化
- スポーツ庁 …… 206
オリンピック・パラリンピック後を見据えたスポーツ庁の施策について
- 文化庁 …… 214
「守る文化」から「守って稼ぐ文化」への転換
- 国土交通省 …… 222
共生社会の実現に向けた国土交通省のバリアフリー推進施策
- 観光庁 …… 232
観光先進国の実現に向けた取り組み

自治体

- 東京都都市整備局 …… 240
東京2020大会の成功とその先の東京の未来へ
- 京都市長 門川 大作 …… 252
100年、1000年先も京都が京都であり続けるために
- 高知県高岡郡梶原町長 吉田 尚人 …… 262
先人の遺産「木」と生きる、地域循環型のまちづくり
- 熊本市経済観光局 熊本城総合事務所 所長 津曲 俊博
…………… 270
熊本地震復興のシンボルとして、熊本城復旧に邁進する

日本の伝統を受け継ぎ 未来へつなげるレガシーを、 建築で体現



建築家 隈 研吾氏

1954年、横浜市生まれ。東京大学工学部建築学科大学院修了。米コロンビア大学客員教授を経て、隈研吾建築都市設計事務所主宰。2009年より東京大学教授。1997年「森舞台／登米町伝統芸能伝承館」で日本建築学会賞受賞。同年「水／ガラス」でアメリカ建築家協会ベネディクタス賞受賞。2010年「根津美術館」で毎日芸術賞受賞。2011年「梼原・木橋ミュージアム」で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。著書、共著多数。

補修しながら使い続けることを前提に

——今回、レガシーをテーマにした書籍作成にあたりまして、先生は建築家の観点から、“レガシー”というイメージをどのように捉えておられますか。

隈 そうですね、一般に建築という行為は、建築物、構造物が出来上がって完成、と捉えられる向きが多く、確かに建築業界としてはそこで一段落つくわけですが、使用者の立場に立ってみると実際には出来上がってからがスタートということになります。従って、これから使っていくという観点からすると、建築とは出来上がってからのほうが重要度が高い。使い続ながら用途や経年変化に応じて適宜補修していくそこをもっと重視しなくてはいけないという、時間の考え方が、近年の日本の建築業界では、主流

になりつつあります。

もともとヨーロッパでは、耐久性の高い石造建築が主流だったこともあり、こうした継続して建築物を使い続けるという観点が一般的です。それに対し日本ではもっぱら木造建築、ことに戦後は都市の集中と拡大に対応すべく、ともかくも早くたくさん家やビルを造ることが第一の目的となり、建築業界ではスクラップビルドの考え方が広がりました。それが1990年代初頭のいわゆるバブルがはじけた頃から、ヨーロッパ流の、できた後の時間を重要視する建築思想が日本にも波及し、建築物を後世まで継承して使う、すなわちレガシーの観点で建築をとらえる気風が徐々に広がったように思います。が、残念ながら日本で戦後に造られたほとんどの建物は、持続的に使うという発想がないまま設計・施工されたので、構造的にも設備的にも長期の使用に耐えうる状態になっていないのが現状です。

——具体的にはどのような部分でしょう。

隈 例えば空調や給排水の設備一つ取り上げても、後々その部分だけ取り換えることを考えずに造ったため、いざ設備部分が壊れてもその部分だけ改修することが構造上不可能となり、建物全体の立て直しを迫られる、といった具合です。

であるならば、これからは“レガシー”という観点を、設計段階から既に取り入れ、最初から設備を交換しやすい、また建屋自体がより長持ちするような発想で建築を考えることが重要です。そうした設計段階におけるフィードバックが一般化すれば、これからの日本の建築はヨーロッパの石造建築に近いイメージで、サステナブル化、すなわち持続可能性が高い方向へ進んでいくと想定されます。実際に、新しい建築プロジェクトの設計においては、クライアント、設計者、施工者ともども、サステナブルの観点を取り入れ始めていますので、将来的にはコンクリート主体の日本の都市でも、老朽化した部分を更新しながら、構造物を長期にわたって使い続けることが主流になっていくと、僕は思います。

——サステナブルな使用を可能とする技術、技法というのは。

隈 一つには、それぞれの部材ごとに仕組みを設定する方法があります。一口に建築と言っても、簡単に言えば構造体があり、外装と内装があり、各種設備関係に分かれるわけです。各部門ごとにそれぞれ耐久年数が異なりますが、やはり設備関係が最も早く老朽化が進み、また居住者の成長や老化に伴い、求める設備の在りようも変わってくるので、長くても10～20年単位で更新が必要となります。場合によっては防寒機能など、後から付加することを考えて外装も改めることもあるでしょう。快適性はサステナブルに使う上で欠かせない要素ですが、それを重んじるほど内装、外装の更新も不可欠となります。

一方、構造体は逆に100～200年単位で長持ちさせることが充分可能です。実際にヨーロッパでは200年保っている建築物は珍しくありません。構造体200年、設備20年という具合にそれぞれ寿命があるならば、その各寿命に応じてきちんと更新できるよう、あらかじめ設計・建設しておくことが求められます。シンプルに言えば、構造体とは別に設備は簡単に取り換えられるようにしておくことが求められます。その部位別の時間設定が可能となると、建築物は後の時代まで継承されるレガシーとなります。従ってマンションなどでも、消費者の目から見て、外装、内装の華やかさより自分がここに長い年月住む、それが可能かどうかという観点に立って選ぶべきです。また、そうした点を意識する消費者も実際に増えています。

——ヨーロッパにおける石造りの建物を見ると、いかにも昔ながらの建築だなあとありますが、では日本における伝統的な建築というと、先生が多く手掛けておられる、木材をふんだんに多用した建築ということになるでしょうか。

隈 確かに、長持ちする建築素材と聞くと石造りをイメージされる方が多いと思われそうですが、実は日本においても古寺の木造建築などは、建てら

れてからそれこそ数百年、1000年を経て現存するものがあり、法隆寺の金堂や五重塔は建造から1300年を超える世界最古の木造建築とも言われています。確かに木材は経年変化で傷むのですが、例えば「雨掛かり」といって雨が直接当たるところには木材を使わないなど、随所に長く保たせる工夫が施されているほか、前述の老朽設備を部分的に取り換えるのと同様、傷んだ個所の木材だけを取り換えることができる構造になっています。こういう発想、技術を昔の日本人は持っていたから、木を使っても気が遠くなるような長期の維持が可能なのです。そう考えると、むしろ石材より木材の方が部分更新しやすく、サステナブルに使うという観点では木の方が適しているとの説もあるほどです。

つまり建築におけるレガシーの思想はヨーロッパだけのものではなく、日本にもしっかりと思想体系の一部として受け継がれ、しかもただ長持ちさせるだけでなく部分更新を可能とするレガシーの概念を、日本人は古来より有していたと言えるでしょう。

また、木を活用するということは、地球環境の観点に立つと、森林の保全につながります。また森林はCO₂を吸収するので地球温暖化防止に役立ちます。つまり、森林は人類にとって最も重要なレガシーであり、木を使うことこそが地球にとってのレガシーなのです。

人々の思いを受け止めて形にしたプロジェクト群 ▶

——その思想が今、隈先生の建築群で体現されています。それでは、数ある先生の作品の中で、主だったものについてレガシーの観点がどう組み込まれたか、教えてください。

隈 まず「新国立競技場」から。ここでは建材としてふんだんに木を使用していますが、実は法隆寺と同様、雨がかからないところに木を用いています。それでも建造後数十年を経ればやはり木材は傷んでくるので、そ

のときは簡単に交換できるように設計しました。

また、競技場本体はもとより、その外周を緑地化しています。競技場はスポーツイベントの時はもちろん使用されますが、むしろその周辺部分を、一般の人が日常的に訪れて憩うような場所にしたいと。そのために昔の渋谷川がここを流れていたという地形の記憶をとどめるよう、雨水を利用してせせらぎをつくり、また周囲の建物の中に空中遊歩道をめぐらせて「空の杜」と名付け、試合やイベントがない時でも人々が楽しめる空間づくりを考えました。こうした日常利用を重視する設計思想で、競技場がスポーツイベント以外の用途でも長く使われていく存在になることを願っています。スポーツ競技場というのはそもそも選手だけではなく、市民がスポーツに親しむ場であり、これからはますますそうしたニーズが高まる時代になるでしょう。そうすることで、スポーツ施設も、市民のレガシーとして愛され続けていくのです。この新国立競技場がその象徴になれば何よりです。

次に「5代目歌舞伎座」を取り上げてみます。実はその前の4代目歌舞伎座が、第2次大戦中に爆撃を受けたために、構造的に非常に弱く、耐震補強も不可能な状態でした。やむなく建て替えを迫られました。一方、4代目歌舞伎座に対しては多くの歌舞伎ファンが愛着を持っていることから、4代目をきちんと継承する形で5代目を建て直す、言わば、新築ながらこれまでの愛着を受け継ぐことが課題でした。かつ、その上に高層ビルを建てなければならない。そのビルの収益で歌舞伎座の運営が成り立ち、手ごろな観劇料で多くのお客様が歌舞伎に親しめる、こうした経済的にもサステナブルな構図を体現する必要があったのです。

さまざまな検討の末、高層ビルを敷地の一番後ろに建てました。通常ヨーロッパの複合型劇場ではエントランスのホワイエの真上にビルが建っているのが一般的ですが、今回は正面の晴海通りからの見え方を重視し、屋根ののった歌舞伎座という昔ながらのイメージに影響を及ぼすことのない

いよう、場内奥の舞台の真上に高層棟がのるよう設計しました。これによりタワーを支える柱を極力少なくし、舞台の両脇でタワーを支える世界でもあまり例がない構造です。通りからは、後ろのタワーは歌舞伎座と別の敷地に立っているようにさえ見えるでしょう。こうして歴代の歌舞伎座が受け継いできた大都会の中の大屋根という、特有の外観を維持することができました。

歴史ある建築物と言えば、三越日本橋店があります。日本のデパートの原点ともいえる重要な建築物のリノベーションです。もともとの建物が竣工したのは、赤レンガの東京駅と同じ1914（大正3）年創建で、当時は「スエズ運河以東最大の建築」と称され、設計は横河グループの創業者で日本の鉄骨構造のパイオニアと呼ばれる建築家・横河民輔（1864～1945）です。デザイン的には、内部の華やかなアール・デコ様式が特徴で、デパートが都市の華であった時代の香りを、最もよく伝える建築といってもいいでしょう。しかしその後、度重なる改修で、だいぶイメージが変わってしまいました。われわれのリノベーションで最も力を入れたのは、このアール・デコの華やかさをいかに取り戻し、インバウンドのお客さまたちからも、「これぞ東京！」と呼ばれるような日本的繊細さをあわせ持つ輝きを再生させるかです。そのために、空間の中に「光の軸」を再生することにしました。放っておくと、バラバラな売り場の集積のようになってしまうデパート空間の中に、強い軸を通し、その軸をアール・デコ様式を思わせるドーム状の天井と特殊な照明によって浮かび上がらせ、空間にメリハリをつけるのです。現代の技術と材料によって1914年よりもあざやかに「東京の華」が再生されることになります。

内容が大きく変わりますが、東京大学内のユビキタス学術研究棟は、最新の情報通信技術を扱う場を伝統的なイメージで覆っていくという意味でユニークなプロジェクトになりました。東京大学はもともと前田藩の屋敷跡で、同研究棟も裏手に藩の屋敷の一つとその庭園がそのまま残っていて

東大総長のゲストハウスになっていました。が、以前はゲストハウスの前面がブロックで遮蔽されて庭に触れることができませんでした。そこで建物の中心に大きな空孔を開け、庭を額縁のように切り取り、学生自身がキャンパス内にこんな庭園があったんだと気づくような、東大の持つ歴史資産と現代の技術をつなげるゲートとしてみました。そのゲートの左手にはカフェがあり、右手にユビキタス研究棟の入り口、そして正面に東大の歴史を表す庭園という配置をしています。通常、こうした最新技術の研究所というと無機質な外観内装をイメージされる向きも多いと思われませんが、ここは木を多用することで温かみと親しみやすさを重視しました。

これからの時代、コンピュータ・テクノロジーが進化するのに伴い、むしろヒューマンとの親和・融合が図られていくものと僕は考えていて、この点はユビキタス研究の第一人者である坂村健教授とも話し、同じ認識を共有しました。その考えから木材の多様につながりさらに庭からのファサードは世界的な左官職人・挟土秀平氏が、ステンレスメッシュにその庭の土を塗り、独特の有機的でしかも透明な質感を出してもらっています。

他にも、「京王高尾山口駅」は、既存駅を修復し、再生させた一つの例になります。これまでの駅の骨格をほとんどそのまま残しながら、新たに庇をつけただけで、外観のイメージが一新されました。修復ですので予算としては限られてはいたのですが、にもかかわらず駅だけでなく周辺のイメージも新しくできた良い例だと言えるでしょう。思うに駅というのは、これからさらに高齢社会が進み、クルマを使った郊外型の生活から歩きが中心の都心部集約型の生活へ移行していく場合、何より人が集う拠点となる場所です。高尾山口駅は生活というより山登りの拠点という観光客中心の駅ですが、駅の印象が観光客のイメージを左右します。公共交通の重要性が高まり、コンパクト社会への指向が高まる今後、駅の果たす役割は、公共交通の結節だけでなくにぎわいの創出、観光産業の活性化という点でもさらに重要なものとなります。駅周辺も含めた大きな空間全体のイメー

ジが、駅によって決定されるといっても過言ではありません。

また名古屋の「御園座」は、歴史を持つ劇場を再生し、高級住宅と組み合わせた形です。ここは歌舞伎以外の演劇も公演するという意味では、地元の人にとって文化の中心であり名古屋の一種の誇りとなっていることに気づきました。モノづくりが盛んで活力と活気にあふれた精神的な都市という名古屋の特性を鑑み、明るく鮮烈な赤、“御園座レッド”を前面に打ち出したのです。重厚感のある東京の「歌舞伎座」の赤に対し“御園座レッド”はヴィヴィッドで華やかな赤で、まず訪れた人の気持ちを高揚させる仕掛けです。そのため改築以前より赤の分量を大幅に増やし、場内の大階段から正面フロア、しかも名古屋市の許可を得て外の歩道のところまで赤を塗り広げました。劇場というものが都市の歴史や特性と溶け合い、文化の中心となっていく以上、イメージされる色合いを公共空間に打ち出すのは非常に重要なことであり、今回、歩道にはみ出すまで赤を大胆に使ったのは、劇場正面の階段をレッドカーペットを歩く気分を味わってほしかったんです。通りから既に文化の核心部へ向かう気持ちを持ってもらいたいと思ったのです。同時に、外壁を構成する“なまこ壁”文様も、以前の御園座からモチーフはあったのですが、この機にLEDを駆使して光のラインが壁面から離れ、空中に浮き上がって見えるようにしました。なまこ壁という伝統的文様を現代技術によって名古屋らしい華やかさで際立たせたわけです。また背景のマンションでは劇場の上の公共スペースを坪庭風にしつらえ、船底天井と相まって伝統文化と連動した住民のためのサロン空間を表現してみました。

これからの都市の在り方として、劇場は劇場、ビルはビル、マンションはマンションとしてそれぞれ個別に存立するのではなく、これまで意識されなかった意外な組み合わせや融合が、都市の新しい顔となり魅力をつくっていくと思います。かつ、その融合が都市のさまざまなヒストリーの上に立脚することで人々の親近感を誘い、海外に対しても日本らしさを発

揮する拠点となり、都市の活力の源泉になると考えられます。

20世紀という時代は基本的にスタンダードなデザインで地域を問わず画一化が進みましたが、これからは都市の魅力をどう掘り下げて個性を際立たせていくか、それには現時点で過去を遮断するのではなく、むしろ過去からのつながりを重視し、どう未来につなげていくかが問われるようになります。僕は一つのプロジェクトを手掛ける前に、まずその地域をリサーチし、観察し、その都市や地域としてのキャラクターを自分なりに感得してから具体的な仕事に入るようにしています。これからの建築家には単に造形力だけではなく、その都市ならではの質感、空気感を表現することが求められます。どのようなプロジェクトにおいても、未来だけで見るのではなく過去からの連続性に基づき未来を見据えれば、おのずとその都市の特性や発揮すべきイメージ、使われる色やモチーフが明らかになってきます。

また京都の「新風館」では歴史的建物の保存・増築をしました。これはもともと1926年（大正15年）に造られた旧・京都中央電話局で、市登録有形文化財に指定されていました。設計は、日本のモダニズム建築を代表する吉田鉄郎（1894～1956）によるもので、彼はヨーロッパから伝わった近代建築の感性と日本の伝統の融合を図った日本のモダニズム建築の先駆として知られています。今見ても、その感性は古びるところなく、例えば窓のプロポーションやレンガのディテールなど細部において和の調和を醸し出す、言わばプロ好みの建築といえるでしょう。電話局の建築に彼はレンガを多用しました。これは周囲にまだ木造が多かった京都のまちの色合いに、レンガ色がマッチすると判断したものと推測されますので、今回の「新風館」建築に当たっては、彼が遺した色をベースに、すなわちブロンズ色を中心とする構成で、僕の手掛けた仕事の中でもこれほどブロンズ色を中心にデザインしたものは他にありません。かつ、塗装によるブロンズではなく自然に発色したブロンズ色のアルミルーバー（細い羽板を間隔

的に平行に並べたもの）を使用し、京都の伝統である木の格子を思わせる組み合わせとし、モダニズムと伝統の新たな融合を表現しました。また背後にオープンする「ACE HOTEL」は既存の高級ホテルの価格体系を超えた新しいライフスタイルを提示するホテルグループの一つとして注目を集めており、そのセンスが分かる人は吉田鉄郎の精神も必ず理解できるはず、と思い今回のデザインに至った、という次第です。

次は大阪の「ホテルロイヤルクラシック 大阪難波」について。ここはもともと大阪新歌舞伎座の建物でした。設備的に老朽化し、新歌舞伎座自体が他の地域に移動したため、あとには用途を失った建物だけが残りました。その使い道がない建物を再度活用しつつ、やはり新歌舞伎座がここにあったという記憶をどう継承するかが、計画のポイントとなりました。そこで、まず建物の外観はそれまでの新歌舞伎座そのままにもう一度造り直し、その奥にホテルとバンケット機能を付加して、その上に東京の5代目歌舞伎座と同じように高層ビルを建てたのです。通りからの外観は可能な限り、以前と変わらない状態を保ち、街の記憶の継承を重要視しました。この場合の“記憶の継承”とは、まちを歩いた時に人間の視点から、建物や通りの光景が不変であるかどうか、です。後部に高層ビルが建ったとしても、まちを歩いた時に変わらない光景、同じ雰囲気であることが非常に大事になります。僕が敬愛する村野藤吾（1891～1984）先生の代表作ともいえる新歌舞伎座は、連続唐破風様式と呼ばれる世界に例のないすごく複雑な造りです。今の技術で復元するのも大変でした。創建当時、手作業で造形した先人の技術力、執念は、ただ感心するばかりです。

また、地域の木材を活用するという点では、高知県梶原町で30年間にわたって、われわれが手掛けてきた庁舎やホテルなど複数の建築群も同様です。梶原町は森林面積が町の90%以上を占める、文字通り“木の町”です。ここにはもともと1954年の林業全盛期に建てられたゆすはら座という木造の芝居小屋があって、それを取り壊す計画が持ち上がり、私の

知人の建築家から保存へ助力願えまいかという連絡をもらったのが、同町とのつながりの始まりでした。1988年のことです。現場に行ってみると当の芝居小屋が昔ながらの形態をとどめて非常に趣深く、なるほど壊すには忍びない、そこで町長にその価値を説明したところ、当時の町長が保存へと方針を切り替えただけでなく、その他の建物の設計も頼まれるようになった次第です。以後の歴代町長も当時の方針を貫き、現在まで30年にわたり3代の町長から計6件の建築を依頼されるに至っています。ある意味、ここは芝居小屋自体が一つのレガシーであり、それが途絶の危機を乗り越え、現在から将来へ、地域全体を巻き込んで、しかも他の建築物と合わせ発展しながら継承された稀有な例だと言えるでしょう。その芝居小屋は今でも使われ、住民の精神的な支柱になっています。

技術継承のため、若い職人に実践の場を！

——これまでの話を伺うと、レガシーとは、まちや地域の象徴であり、気持ちのよりどころという性格を色濃く持っているのですね。

隈 そうした建物に寄せられた思いというものを、できるだけ温かくて優しい素材を使って体現したいと考えています。ストレス過多な現代社会において、また今後さらに格差社会が激しくなると想定されるからこそ、癒しや安心を醸し出せる建物を目指していきたいですね。利活用の頻度や多機能性だけでなく、レガシーにはこうしたメンタル的な側面も求められます。メンタルな効果があるからこそ後世まで継承されていくのでしょうか。これからの設計者はこのような観点も常に意識しなければいけないと思います。

——古来より現在まで、多くの建築物を形にしてきた日本の技術者ですが、高齢化に加え職人の数そのものが少なくなっています。地震の被害を受け現在修復中の熊本城ですが、石垣を修復する専門の職人が足りない

か。レガシーを体現し、継承していく上で欠かせない若い職人をいかに育てていくか、先生のお考えはいかがでしょう。

隈 職人の方々が技術を身につけ継承を促すためには、仕事を発注するのが一番です。職人養成の学校をつくったり講座を開設するなど座学ももちろん大切ですが、実践に勝る技能習熟の場はありません。日本の職人は、こうした実践場を数多く踏み、先達から教えられながら技能を身につけてきたわけですから、今後彼らにその場をどれだけ多く与えられるかが、日本の技術継承、品質の維持を図るのに最も重要なポイントとなります。

必ずしも大きな案件でなくてもよいのです。身近な建物の修復でもよし、とにかくいろいろな仕事をして場数を踏むことに尽きますね。逆に日本型技術はマニュアル化しにくいので、座学で教えるのが難しく、一度でも途切れてしまうと後世までその影響が及びます。今、それが危惧されてなりません。この点、行政は座学の場もさることながら、実践の場をできるだけ多く設ける方向で考えてもらえるとうれしいですね。大した予算増を行わなくても、職人に活躍の場を与えることは可能なのです。われわれが職人とコラボして作る建築は、決して坪単価が高いわけではありません。日本の職人は、そもそもきわめてリーズナブルな日当で働いてくれる、勤勉な方達です。

——日本中のあらゆる分野が、オリンピック・パラリンピックが開催される2020年へ向けて邁進しています。建築界を含め、その後の社会をどのように展望しておられますか。

隈 2020年のずっと先まで見通した長期的なビジョンが必要になります。過去からのレガシーを大事にし、2020年を超えて継続する、息の長い取り組みが求められるでしょう。少子高齢化は2020年以降に本格化します。2020年はその入り口にすぎません。従って2020年を超えた後に、レガシーの本番が来ると思います。

——貴重なご示唆をいただきました。ありがとうございます。